

nOriko

chante

les chansons françaises
d'hier et d'aujourd'hui

@ Les Femmes Fatales
le 8 mai 2008
à Kôendôri Classics

avec

Naoko ETÔ (Giulietta Machine), pf
et Wataru KONDÔ, luth

Programme

C. Debussy, *La Flûte de Pan*
C.ドビュッシー 《パンの笛》

G. Fauré, *Le Secret*
G.フォーレ 《秘密》

G. Fauré, *Au bord de l'eau*
G.フォーレ 《水のほとりで》

P. Guédron, *Belle qui m'avez blessé*
P.ゲドロン 《美しい女よ、私を傷つけ...》

F. Richard, *Ruisseau qui cours après toy-mesm*
F.リシャル 《流れる小川、自分を追いかけ...》

E. Satie, *Sports et divertissements (Extraits)*
E.サティ 《スポーツと気晴らし》より

F. Poulenc, *Les Chemins de l'amour*
F.プーランク 《愛の小道》

S. Gainsbourg, *La Noyée*
S.ゲンズブール 《溺れる女》

Poison Girl Friend, *Doomed Love*
ポイズン・ガールフレンド 《ドゥームド・ラヴ》

G. Fauré, *Nocturne*
G.フォーレ 《夜想曲》

nOriko et Darie

C. Debussy, *La Flûte de Pan* C.ドビュッシー 《パンの笛》

作家ピエール・ルイス Pierre Louÿs (1870 - 1925)の詩集『ピリティスの歌 *Chansons de Bilitis*』(1894)からクロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862 - 1918)が3編を選んで歌曲とした《3つのピリティスの歌》の第1曲。



1897,8年にかけて作曲。ルイスが想像上の古代ギリシアの世界に吹き込んだ、若々しいエロティシズムの香りを、少女の自由な語りを模した歌と、パン(牧神)の笛を思わせるピアノで立ち上らせてくれる—「ヒヤシンスの祭りの日に、あの人にはパンの笛をくれた。切りそらえた葦を、唇に蜜のように甘い白いロウでつなげて作って。／吹きかたを彼が教えてくれる。膝の上に座らせて。でも私ちょっと震えてる。彼は私の後に吹いてくれる。聞こえないくらいそうと。／お互い言葉はいらぬ。こんなにもそばにいるから。でも歌と歌が自然に答える。唇はかわりばんこに笛にあたって結ばれる。／もう日が暮れる。そう、夜に鳴き出す青蛙の歌がする。お母さんはぜったい信じてくれないわ。こんなにいつまでも探しものしてたなんて。ベルトなくしちゃって。」

G. Fauré, *Le Secret* G.フォーレ 《秘密》

ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré (1845-1924)が1880年、アルマン・シルヴェストル Armand Sylvestre(1837-1901)の詩「謎 *Mystère*」(1878)に作曲、現行タイトルで、《3つの歌曲》作品23の3曲めとして発表された。もっぱらゆったりとした和音の打鍵の連続でピアノが創り出す宗教的ともいえるほどの静けさを背景に、抑制(秘密)、愛の充足の自信、表出の欲求(秘密をうちあげたい)の間のあやういバランスの上の一種の幸福感が歌となっている—「朝には知られたくない／夜に教えたその名前、／夜明けの風に、音もなく／涙の粒のように消えてくれたら。／／昼がみんなに言ってほしい／朝には隠したその愛を／私の開いた胸にかがみ込み／お香の粒にして燃やしてほしい。／／夕日が忘れてほしい／昼に教えたその秘密を／私の愛と持って行って／淡い光のドレスのひだにつつんで。」

G. Fauré, *Au bord de l'eau* G.フォーレ 《水のほとりで》

スユリ・プリュドム Sully Prudhomme (1839-1907)の同名の詩(詩集『虚しい優しさ *Vaines tendresses*』(1875)所収)に作曲(1875年8月)。《3つの歌曲》作品8の第1曲目として発表された(1877)。川のほとりに座っている二人、水の流れも、雲の流れもただ行くだけ。遠くの煙も、あたりを漂う花の香りもただあるがままに。ただただ動いてゆく外の世界と、それをよそに二人だけの愛の世界で時がとまるのを感じる静かな情熱に満ちた瞬間、その対比を、原詩は10音節と4音節の交替のくり返りで描いている。フォーレはそれを、水に象徴される時のたんとした流れを感じさせるピアノと、二人が目にし、感じるままをそれと対話しながら歌う声のパートによって音楽にしている。幸福感にあふれた歌だが、「情熱の火のくすぶる傷口を一つの詩節が開きにやってくることもあるだろう」というのは、プリュドムが詩集の序文にのせた言葉。本日はオリジナルの日本語訳詞によって歌われる。

E. Satie, *Sports et divertissements*

E.サティ 《スポーツと気晴らし》



モード・イラスト誌の編集・出版者リュシアン・フォージェル Lucian Vogelの Erik Satie (1866 - 1925)への依頼で1914に作曲。フォージェルのアイデアは、当時の人気風俗画家のシャルル・マルタン Charles Martin (1884 - 1934)の絵と、同時代作曲家の短いピアノ曲を組み合わせて出版しようというものであった。いくつかの紆余曲折を経て、1923年に20曲の曲集として出版。主題を風刺的に扱う語りを伴う、サティらしい

しい皮肉と機知に満ちた曲。本日の演奏はそのうちから7曲—ブランコ(Balançoire)、めかくし鬼(Colin-maillard)、海水浴(Bain de mer)、カーニヴァル(Le Carnaval)、陣取り遊び(Les quatre coins)、タンゴ(Le Tango)、いちやつき(Flirt)。

P. Guédron, *Belle qui m'avez blessé*

P.ゲドロン 《美しい女よ、私を傷つけ...》

ピエール・ゲドロン Pierre Guédron (1565ごろ - 1649/50)は、1570年代から17世紀前半にかけてフランスで盛んであったエール・ド・クール air de cour と呼ばれるジャンルを代表する作曲家の一人。直訳すれば「宮廷の歌」となるエール・ド・クールは、フランスの宮廷で歌われた世俗歌曲やそのスタイルによる歌曲に単声・多声を問わず与えられた名。通常はリュートの伴奏を伴い、当時流行してきたイタリア様式の歌曲より、簡素さ、歌詞の明瞭さへの志向で、より古典的な響きがする。《美しい女よ、私を傷つけ...》は、男性が自分を打ち捨てる美女への愛と嘆きを歌にする中世以来のフランスの宮廷愛の伝統の主題に典型的によっている。

F. Richard, *Ruisseau qui cours après toy-mesme*

F.リシャール 《流れる小川、自分を追いかけて...》

リュート奏者でエール・ド・クールの作曲家であった、フランソワ・リシャール François Richard (1580ごろ? - 1650)が、マルカントワーヌ・ジラルド・ド・サンタマン Marc-Antoine Girard de Saint-Amant (1594-1661)の有名な詩、「シルヴィーの死を嘆いて」に作曲したエール・ド・クールで、自由なリズムによる歌が悲しみの独白のさまを際立たせる—「自らを追いゆく水の流れよ / 自らから逃れゆく流れよ / 少しその波をとめてくれ / 私のこの激しい悲しみを聴くために / そしてそれを知ったなら、海のもとへ行き / これほど苦いものはないと告げてほしい ...」



F. Poulenc, *Les Chemins de l'amour* F.プーランク 《愛の小道》

フランシス・プーランク Francis Poulenc (1899 - 1963)が、1940年に上演された劇作家ジャン・アヌイ Jean Anouilh (1910 - 1987)の戯曲『レオカディア *Léocadia*』のために作った音楽の一部をなす劇中歌だが、今日では人気歌曲としてもつばら独立して歌われている。初演にこれを歌ったオペレッタのディーヴァ、イヴオンヌ・プランタン Yvonne Printemps (1894 - 1977)にささげられており、「偽ウィンナ・ワルツ風に」とは作曲者自身の言葉。タイトルの chemins (小道)は複数形で、「愛の小道」は単なる一本の散歩道ではなく、歌の中では、迷い道でもあり、絶望の道や、思い出にしかない道でもある。そして、失った愛の悲しみとともに、愛を歩んだいろいろな道はずばらしいと、選びとられた軽妙さで歌われる。

S. Gainsbourg, *La Noyée* S.ゲنزブール 《溺れる女》

セルジュ・ゲنزブール Serge Gainsbourg (1928 - 1991) が1971年の映画『馬泥棒の恋 *Romance of a Horse Thief*』のために作った歌。イヴ・モンタンにシングル盤の録音が提案されるが、モンタンは興味を示しつつも、その歌詞が妻のシモーニュ・シニョレのアルコール中毒と連想的に結びつく恐れがあるとして結局拒否。それ以来さしたる録音がなく埋もれ、ゲنزブールの隠れた名曲という存在となっていた。過去の思い出に溺死していく女、彼女とひとつになるためにそこに飛び込む私。2002年に自らのアルバムで取り上げ、この曲に新たな脚光を浴びさせたカーラ・ブルーニが驚嘆の言葉で語っているように、音楽のリズムを通してことばのリズムを新しく見だし創り出すゲنزブールの手腕がいかに発揮されている。

<http://www.psychopla.net>

Poison Girl Friend, *Doomed Love*

ポイズン・ガールフレンド Poison Girl Friendの1993年のアルバム《シャイネス *Shyness*》所収曲。作詞・作曲ともnOrikO。日本語の歌詞と、フランス語、英語の語りを持つ。アルバムでは、エレクトロ・アンビエント系の編曲になっているが、今回の演奏会ではおもむきを変えて、ピアノ伴奏だけで。作曲は93年の《シャイネス》での発表より数年前にさかのぼり、別のアルバムのためにアコースティック楽器編成によるヴァージョンを録音していたが、レコード会社の都合で日の目をみなかったとは、作曲者が明かすエピソード。

G. Fauré, *Nocturne* G. フォーレ 《夜想曲》

ヴィリエ・ド・リラダン Villiers de l'Isle-Adam (1838 - 1889)の『残酷物語 *Contes cruels*』(1883)に収められた詩「眩惑 *Eblouissement*」に、現行タイトルで1886年に作曲、《2つの歌曲》作品43の第2曲として出版。夜のとぼりが降りてきて星々が見えてくる、それを、詩人は、あたりが光輝き、花開くダイナミックな瞬間と見、それを前にした驚きをことばにする。作曲家はそれを、夜想曲という彼の偏愛する様式ジャンルで音楽にし、さらに子守り歌のリズムで、はっとした驚きが眠りの静けさにのみこまれていく移ろいやすい時間を余韻とともに味あわせてくれる。

